

# ダニエルの書 - ナンバーワン

## ウライとヒデケル

Jeff Pippenger

2023-11-21

聖職者も一般の人々も、ダニエル書と黙示録の預言は理解不能な神秘だと宣言した。だがキリストは、彼らの時代に起こる出来事に関する預言者ダニエルのことばに弟子たちの注意を向け、「読む者は悟れ」と言われた。マタイ 24:15。さらに、黙示録は理解されるべきでない神秘だという主張は、この書の表題そのものによって覆されている。「イエス・キリストの啓示。神は、すぐに起こるべきことをそのしもべたちに示すために、それを彼にお与えになった。…この預言のことばを読む者、またそれを聞いて、そこに書かれていることを守る者は幸いである。時が近いからである。」黙示録 1:1-3。

預言者はこう言う。「読む者は幸いである」——読むことをしようとしなない者たちもいる。祝福は彼らのものではない。「また、聞く者も」——預言に関することは何ひとつ聞こうとしなない者たちもいる。祝福はこのような者のためのものではない。「そして、そこに記されたことを守る者も」——黙示録に記されている警告や教えに耳を傾けるのを拒む者が多い。これらの者はだれひとりとして、約束された祝福にあずかることはできない。預言の主題を嘲り、ここに厳粛に与えられた象徴をあざけり、自らの生き方を改めることを拒み、人の子の来臨に備えようとしなない者はみな、祝福を受けないであろう。

靈感の証しに照らして、よくも人は、ヨハネの黙示録は人間の理解の及ばない神秘だと教えることができるのか。それは明らかにされた奥義であり、開かれた書である。黙示録の研究は心をダニエル書の預言へと向けさせ、両者は、この世の歴史の終わりに起こる出来事に関して、神から人に与えられた最も重要な教訓を示している。大いなる闘争、340。

「黙示録の研究は心をダニエルの預言へと向ける」。ダニエル書の中にしか預言を見いださない人もいる。しかしダニエルは二つの真理の筋道を提示しており、そのうち預言そのものを表す真理は彼の書の後半六章にある。前半六章は例示的な預言を提示しているが、それは概して今なお認識されていない。ダニエル書の前半六章を考察する前に、実のところ後半六章には二つの預言しか示されていない理由を説明しよう。シスター・ホワイトは、シナルの二つの大河に言及することで、その二つの預言を指摘している。彼女の示す象徴を受け入れると、ダニエル書の後半六章に二つ、しかも二つだけの預言を見るための鍵が見いだされる。

ダニエルが神から受けた光は、この終わりの時代のために特に与えられたものであった。シナルの大河であるウライ川とヒッデケル川のほとりで彼が見た幻は、今や成就しつつあり、予言されたすべての出来事はまもなく成就する。『牧師たちへの証言』112。

第八章の幻はウライ川のほとりで示された。

ベルシャザル王の治世の第三年に、最初に私に現れた幻の後に、私ダニエルに幻が現れた。私は幻の中で見た。私が見ていたとき、私はエラムの州にあるスサの宮殿にいて、また幻の中で見たところ、私はウライ川のほとりにいた。ダニエル書 8:1, 2.

ホワイト姉妹が「the Ulai and Hiddekel」に言及し、それらを「the great rivers of Shinar」と呼んだ『Testimonies to Ministers』の段落を取り上げたとき、私たちは、ホワイト姉妹の著作におけるダニエル書と黙示録の研究に関する最も重要な注解の一つから、その段落を精査していたのです。その箇所では彼女はこう述べています。「神の言葉をもっと綿密に研究する必要がある。とりわけ、私たちの働き歴史にかつてなかったほどの注意を、ダニエル書と黙示録に払うべきである。」

先ほど引用したダニエル書第8章の最初の二節を注意深く調べると、しばしば見落とされがちな事実を裏づける二つの内的証拠が示されている。ダニエルは「ベルシャツアルの第三年に、ひとつの幻が私に現れた」と言う。さらに彼は「最初に私に現れたものの後に」と付け加える。この節は二通りに理解でき、どちらにしても結論は同じである。

天使ガブリエルは、サタンに代わって天の光の担い手となっていたため、すべての預言者に対してそうしてきたのと同様に、ダニエルにも預言の光をもたらした。つまり、聖書に記されているあらゆる預言の原則はガブリエルに導かれていたということになる。ダニエルがそれを理解していたかどうかにかかわらず、8章1節において彼は重要な預言的洞察を示しているだけでなく、その節の中でその重要な預言的洞察について二つの証しを与えている。ダニエルが1節に記したのは、ウライ川のほとりで受けた幻の前に、すでに一つの幻を受けていたということだ。ウライ川のほとりで幻はベルシャザルの第三年に与えられた。ウライ川のほとりで幻の前のその幻は、ベルシャザルの第一年に与えられた。

バビロンの王ベルシャザルの治世の第一年に、ダニエルは寝床で夢と頭に浮かぶ幻を見た。そこで彼はその夢を書き記し、その事柄の要点を述べた。ダニエル書 7章1節。

ダニエル書第八章一節で、ダニエルは「はじめに私に現れたものの後に」と述べているので、彼はまたベルシャザルの第一年にも幻を見ていたことを示している。ウライの幻はベルシャザルの第一年の幻の後に現れたのか、それとも二つの並行する幻のうち最初のものの後に現れたのか。どちらの答えも正しい。ウライ川の幻は、第七章の幻と同一の幻である。ガブリエルは、「反復して拡大する」という預言の原則を用いると同時に、「二人の証言によって事が確立される」という規則を適用している。どちらの幻も、聖書の預言における諸王国を扱っている。

第七章の幻は、それらの王国を猛獣として描き、彼らの政治的権力という文脈で強調して提示している。第八章の幻は、同じ王国を神の聖所の奉仕に由来する象徴で描いているが、その聖所奉仕の象徴はいずれも、偽りの礼拝を表すために意図的に歪められている。ダニエル書第八章は、第七章の幻と同じ王国を描いているが、それらの王国を宗教的な文脈に置いている。

ダニエル書8章のウライ川の幻は、7章の幻を繰り返して、さらに詳しく展開している。7章は聖書預言における諸王国の政治的側面を示し、8章は聖書預言における諸王国の宗教的

側面を示す。これが認められると、7章と8章は同じ幻であると理解できる。9章では、ガブリエルが来て、8章の幻における時間の要素について説明する。したがって、ウライ川の幻はダニエル書の7章、8章、9章を表している。続いて、10章でヒデケル川が紹介される。

ペルシアの王キュロスの第三年に、その名をベルテシャザルと呼ばれていたダニエルに、一つの事が示された。その事は真実であったが、定められた時は長かった。彼はその事を悟り、幻を理解した。そのころ、私ダニエルは三週間のあいだ喪に服していた。私はうまいパンを食べず、肉もぶどう酒も口にせず、また身に油を塗ることもしなかった。三週間が満ちるまで。

第一の月の二十四日、私は大河ヒデケルのほとりにいた。ダニエル書 10:1-4.

ヒデケル川の幻は、北の王の予言的な歴史を導入している。これはアレクサンダー大王の王国の分裂から始まり、その後の歴史の興亡を示し、最終的にはアレクサンダー大王の旧王国の崩壊から残る唯一の二つの敵対勢力が、文字通りの南の王と文字通りの北の王であることを明らかにする。やがて教皇制の歴史に至り、そこで教皇制が霊的な北の王となり、十一章の終わりで彼はその終わりに至り、ミカエルが立ち上がり、人類への猶予期間が閉じられる。簡単に言えば、ウライ川の幻は神の聖所と軍勢に関する内的な幻であり、ヒデケル川の幻は同じ歴史における神とその民の敵に関する外的な幻である。これは、黙示録の七つの教会と七つの封印に見られるのと同じ原則を用いている。

多くの牧師は、黙示録を解き明かそうとしない。彼らはそれを、研究しても益のない書だと言う。象徴や記号の記述が含まれているため、それを封印された書だと見なししている。しかし、その書に与えられている名、すなわち「黙示録」自体が、この仮定を否定している。黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それは、地上の歴史の最後の日々に起こる驚くべき出来事を記録している。この書の教えは神秘的で不可解なものではなく、明確である。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。いくつかの預言については、神が繰り返しておられ、それによって、それらを重要視すべきであることを示している。主は、大した意味のない事柄を繰り返されることはない。『Manuscript Releases』第8巻、413頁。

ダニエル書に示されているのと同じ内的小および外的歴史が、ヨハネの黙示録でも扱われている。これら二つの幻からもたらされる予言的な光とは別に、ウィリアム・ミラーが採用し、その後フューチャー・フォー・アメリカが採用した聖書解釈の方法論が正しいことの確認もある。正しく考えるなら、ダニエル書とヨハネの黙示録は、聖書自体がその中で明らかにしている預言解釈の原則を裏付けるための、まさに宝の山である。

ウライは内的な主題、ヒデケルは外的な主題であり、さらに、それらは「終わりの時」に封印が解かれるはずであった二つの預言をも表している。ウライは1798年の「終わりの時」に封印が解かれ、ヒデケルは1989年の「終わりの時」に封印が解かれた。そのとき、ダニエル書11章40節に記されているように、旧ソビエト連邦を表していた諸国は教皇権とアメリカ合衆国によって押し流された。

これらの事実が認められると、二つの幻は実際には一つの幻であること、すなわち七つの教会と七つの封印の予言的な歴史が同一の予言的な歴史を表しているのと同様であることもまた認められる。その二つの幻は、主が過去の第一の天使の運動において用い、また現

在および将来の第三の天使の運動において用いられる手段となり、ダニエル書12章9節と10節に示されているとおりの試練の過程を生み出す。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

1989年にヒデケルの封印が解かれたことの一例として、インスピレーションが語ってきたことを考えてみてください。

『黙示録』において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言の部分である。御使いは命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、このことばを秘め、書を封じよ。終わりの時まで。」ダニエル書12章4節。『使徒行伝』585頁。

ウライとヒデケルはいずれも終わりの時に関係しているが、アドベンチズムは、1798年がダニエルのいう「終わりの時」、すなわち彼の書の封印が解かれる時であったことだけを認めてきた。しかし「終わりの時に関する」預言の箇所としてより正確なのは、ダニエル書11章の最後の6節である。というのは、それらの節は、人類の恩恵期間が閉じるときにミカエルが立ち上がることで締めくくられているからである。

ダニエル書第7章・第8章・第9章で示されている裁きの幻は、1798年の「終わりの時」まで封印されていた。（封印が解かれたウライの幻がもたらした）光は、裁きの終結ではなく、調査審判の開始の告知であった。ヒデケルの幻とともに解かれた光は、調査審判の終結を示しており、同時に、それはダニエル書の中で「終わりの日々に関する預言の部分」を含む箇所でもある。

1798年の封印解除は、調査審判の開始を告げた。1989年の封印解除は、調査審判の終結が間近に迫っていることを告げた。アルファとオメガのしるしはダニエル書の中に容易に見て取れるが、それが何であるかを知り、それを探そうとするならば、の話である。

ダニエル書11章45節において恵みの時が閉ざされるとき、アルファでありオメガである方の署名が記されている。ダニエル書の冒頭は、それがどこで終わるのかを正確に示している。文字通りのバビロンと文字通りのイスラエルの間の文字通りの戦争から始まり、文字通りのバビロンが勝利する。

ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。主はユダの王エホヤキムと神の宮の器の一部を彼の手に渡した。彼はそれらをシニアルの地の自分の神の神殿に運び込み、その器を自分の神の宝物庫に納めた。ダニエル書 1:1、2。

ダニエル書第十一章四十五節では、「北の王」として象徴される霊的バビロンと、「栄光ある聖なる山」として表される霊的イスラエルとの間の霊的な戦いが終結し、霊的イスラエルが霊的バビロンに勝利する。

彼は、海と海との間、麗しい聖なる山において、王の天幕を張る。だが、彼はその終わりに至り、彼を助ける者はひとりもない。その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君ミカエルが立ち上がる。また、その時、国が存在して以来その時に至るまで、かつてなかったような苦難の時が来る。その時、あなたの民のうち、書に記されている者はみな、救い出される。ダニエル書 11:45; 12:1.

ダニエル書と黙示録は一つの書である：

ダニエル書とヨハネの黙示録は一つである。一方は預言、他方は啓示であり、一方は封印された書、他方は開かれた書である。ヨハネは雷が語った奥義を聞いたが、それを書き記さないようにと命じられた。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971ページ。

二つの書は、同時に一つの書でもあり、天使ガブリエルの預言的教への傑作である。ガブリエルがダニエルとヨハネに伝えたものは、父から受け取ったイエスから来たものであることを十分承知したうえで、私はこれを書いている。私の意図はガブリエルを讃えることではない。そうではなく、私たちが見ようとするなら、アルファでありオメガであるお方が二つの書のうちに表されるよう設計された聖書解釈の預言的規則を、両書に示された証拠がいかに深く啓示しているか、その啓示を高く掲げることにある。

ここで改めて言うておきますが、現時点での私の目的と意図は、ウライ川とヒッデケル川に関する二つの預言の解釈を提示することではありません。私の目的と意図は、ダニエル書の最初の六章にある預言を取り扱うことです。私はただ、ダニエル書と黙示録が、おそらく神の言葉の中で最も精緻に構成された書であるということを論じているにすぎません。これらの書は、預言のメッセージを提示すると同時に、神の性質を明らかにし、さらに、人が預言を知り、またその預言を示された方を知るために用いるべき原則そのものをも示しています。

書物の深遠さのもう一つの例は、レビ記二十六章の「七つの時」をダニエルが示していることである。「七つの時」の預言は、古代イスラエルにおいても、第一の天使のミラー派運動においても、そして現在および将来の第三の天使の運動においても、神の民にとっての「つまずきの石」であったし、今もそうである。端的に言えば、「つまずきの石」とは、明らかにそこにあるのに目に留まらないもののことである。それゆえ、ダニエル書の中に「七つの時」をいったん認識すれば、それが明らかにそこにあることが分かるが、同時に、見ようとしぬ人々には隠されていることも分かる。

何かが文法上はあらわになっているのに、それを隠してしまうことは深遠な偉業であり、人間が書きたいかなるミステリー小説にも織り込むことはできない。それは傑作である。というのも、それはそこにあり、つまずきたくない者にははっきり見えるが、つまずくことを選ぶ者には決して見えないからだ。いわば「白昼堂々と隠れている」のだ。それは人間性と神性の融合によって成し遂げられる。

私はそう主張する。というのも、この時点で私たちに思い起こしてほしいのは、少なくとも1957年に『Questions on Doctrine』が刊行されて以来、アドベンチズムの内部にはカトリック的な教えが存在しており、その不義の頭がフューチャー・フォー・アメリカのこの「現在の真理」運動の中にももたげているということである。その考えとは、受肉に

際してキリストはマリアから受け継いだ肉体を取らなかったというものだ。もちろん、この教えを支持する人々はそのような言い方はしないが、結局のところ彼らが教えているのはそういうことである。私がそれをカトリック的教えと呼ぶのは、キリストの肉体が、アダムが罪を犯す前の肉体と同じほど純潔であったという前提が、いわゆる「無原罪の御宿り」の教えにおいてカトリック教会が用いる、まさにサタンの論法だからである。もしあなたが「無原罪の御宿り」という異教的な教えに不案内であるなら、それは、キリストの肉体は、アダムとエバが罪を犯す前のアダムの下位の性質がそうであったように、超自然的に造られた、すなわち主張される場所では、キリストは墮落前の、罪のないアダムの本性を持っていた、と教えるものである。さらにそれは、マリア自身が、聖霊が幼子イエスを彼女の完全な肉体のうちに受肉させるための完全な器となることができるように、アダムが罪を犯す前の、肉体において墮落していない本性を奇跡的に与えられたと教える。

もちろん、アドベンチズムの中でイエスの肉体についてまったく同じ結論を支持する者たちは、マリアに関するいかなる奇跡も引き合いに出すことはしないが、ホワイト夫人や聖書の記述をねじ曲げて、まったく同じカトリックの概念を教える。なぜ私がいまダニエル書の議論から脇道にそれたのか。答えよう。

ダニエル書と黙示録の奇跡的な構造と設計は、人性と神性の結合によって成し遂げられた。イエスは神のことばであり、聖書もまた神のことばである。イエスの神性と人性は、聖書の中に完全に表されている。そこに記されたことばは神のものであり、心と思いを変える創造的な力を備えている。そのことばこそ、万物を存在へと生み出したのと同じ力である。しかし、聖書を記録する器として神が選ばれた人々は、みな罪人であった。この結合のうち人間の側は、墮落した人間によって表されている。聖書は人性と神性の結合であり、預言者たちも、アダムの子らがみなそうであるように、罪人であった。キリストは、思いと言葉と行いにおいて一度も罪を犯さなかった。しかし、彼は四千年の退化を経たマリアの肉体をお取りになった。もし彼が実際に、アダムが罪を犯す前のアダムの、より低い肉体的性質を取られたのだとしたら、聖書の著者はみな、同様に罪がなかったはずだということになってしまう。

ダニエル書における「七つの時」が「堂々と隠されている」という事態は、ダニエルが記録した言葉だけでなく、欽定訳聖書を翻訳した墮落した人間たちによっても成し遂げられた。墮落した人間はダニエル書に二度関わったのであり、そこで成し遂げられたことは、神の摂理的な監督なしには、いかなる人間にも不可能だっただろう。

今回の記事では、神と人間がどのようにしてダニエル書の中に、誰の目にも触れる形でレビ記二十六章の「七つの時」を隠したのかを示し始めます。というのも、神はそれが、第一の天使の運動にいる者たちにとっても第三の天使の運動にいる者たちにとっても、試しの「つまずきの石」となることをあらかじめ知っておられ、しかもそのようにお定めになっていたからです。

ダニエルが神から受けた光は、この終わりの時代のために特に与えられたものであった。シナルの大河であるウライ川とヒツデケル川のほとりで彼が見た幻は、今や成就しつつあり、予言されたすべての出来事はまもなく成就する。『牧師たちへの証言』1

12.